

【獣医さんのアルバムから(93)】

楽即能久。楽しいから、 続くんだよね。

富 張 瑞 樹

(帯広畜産大学 臨床獣医学部門 診断治療学分野)

酪農学園大学の遠藤能史先生よりバトンを受け取りました、帯広畜産大学の富張瑞樹です。

私が昨年4月に帯広畜産大学に着任して以来、早いものでもう1年が過ぎました。まだまだ駆け出しすぎる若造の至らなさ、知識も経験も絶対的に不足している自分を痛感した1年であり、今日もまた日々是精進を旨に励んでおります。そんな私に、遠藤先生からのバトン。前回の遠藤先生は私を指して“一緒に切磋琢磨して”くださると書いて下さいましたが、同じ新任の教員として、互いを高めあいつつそれぞれに貢献、還元していけたらいいねと語り合える素晴らしい方です。そんな遠藤先生とは出身である東京大学つながりですが、私のアルバムはその当時の写真から始めようと思います。

写真1は1999年、当時所属していた研究室の忘年会後の集合写真です。研究室の名前は獣医臨床病理学教室。写真中央にいらっしゃるのが、先3月、見事に定年を迎えられご退官された恩師・小野憲一郎教授です。左前でヤンキー座りよろしくこちらに笑んでいらっしゃるのが現北海道大学教授の稲葉睦先生。また小野先生の右の総髪なダンディー先生が、当時助手であった松本直章先生です。これら恩師の先生方にくわえて、院生や研修医、学部学生、留学生あわせて総勢20名の忘年会でした。



写真1

当時の私は、動物医療センターでの小動物臨床に従事し始めて2年弱、臨床の現場が楽しくて、辛くて、面白くて、悔しいことを味わい始めた頃でした。この頃はまだ学生が直接飼い主さんと応対して問診をとることが許されていた時代であり、診療方針、検査項目、診断、治療法の決定、投薬の準備とすべてに関わることができました。しかしながら、逆に言えば学生一人一人にそれだけの知識量と判断力が求められていた訳でもあり、勉強会や輪読会など先生方や諸先輩方にはきめ細かく徹底して育てていただいた記憶があります。実際、英語の教科書と格闘する日々は当時の私にとって（今でも）本当に苦痛の一言でしたし、毎週毎日なにかしらの入院や発表準備におわれ、午前様で家にたどりついては布団に直行という日々でした。辛かったけれど…楽しかったなあ。

一方で私は、稲葉助教授のもとで「黒毛和種牛バンド3欠損牛おける膜骨格蛋白質の異常」という全く未知の研究の世界に足を踏み入れ始めた頃でもありました。分子生物学の世界に広がる緻密なシステムの数々は驚きの連続で、目に見えない分子の世界を「みる」ために、ああでもないこうでもないと思ひながらひとつの事象を証明できた時の喜び！わからない、ことがもしもわかったら、やっぱり楽しいでしょ？といつも笑ってくださった稲葉先生の人懐っこい笑顔なくして、私の研究生生活は語れません。

そしてこの当時、今でも覚えている思い出深い言葉がひとつ。それが上記忘年会の時だったかと思うのですが、4つ年上であった越野さんという大学院生の方が、進路を決めた時期の心境を語ってくれた時のことでした。「今までさ、おれのやってきた研究が、いつの間にかうわあ面白い！すげえ！って思えるようになってきたらさ、突然『他の人にこのテーマ渡しちゃう』ってことが、本気で悔しくなっちゃったんだよね。」と。本気で「面白い」んだよ、だから、大学院に進んだんだ。だからこそ、この道を進んで行きたいんだよね、と。

面白いと強く思えるようなことがなかった当時の私にとって、アルコール臭満載な先輩の言葉は、あっさりすくっと胸に刺さってしまったのです。いつか自分も、こんな風に胸を張って、自分にとって面白いと思えることを下の学生さんや他の人に言えるようになりたいものだなあ、と。普段おちゃらけていた先輩だから、ギャップが余計に見事だったのかもしれない。

東京大学での博士課程修了後は、縁あってテキサス大学サウスウェスタン医療センターという研究機関で3年間、ポスドクとして研究に従事させて頂きました。写真

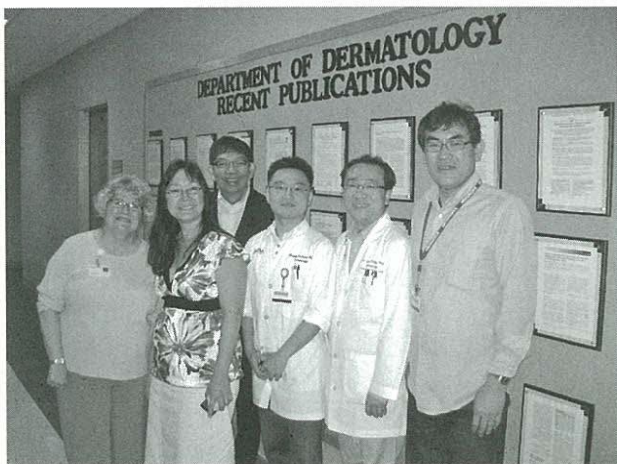


写真 2

2は、当時私が所属していたラボの皆です。

小さなラボだったのですが、綿密な briefing と果敢な実行力が売りの「生きの良い」ラボでした。来る日も来る日もメラノーマのことだけを考える日々は、想像していたよりもかなりハードで、またその内容だけに没頭できるという意味でとても幸せな時間でもありました。研究者のプロとしての責任と pride、また Science の奥深さ、そこに見える「掘り出していかなければいけない真実」を魅せていただけた3年間だったなぁと実感しています。

そんなアメリカ時代、基礎研究の面白さにどっぷり浸かる日々が続けば続くほど、遠のいてしまった臨床時代が無性に恋しくなっている自分に気づきました。獣医である限り、獣医診療の現場から離れたくはないという希望。診療の最前線から、研究につなげる仕事、さらには「誰かに面白さをまっすぐ伝えていける仕事」に就きたいと思う心の願望。それらを経て、幸運にも初志を貫くことができ、現在の帯広畜産大学に職を得ることができたというのが現況であります。

東京大学時代の恩師、小野憲一郎先生は「楽しいと思えることだから、続けることができるんだよ」と何度も諭して下さいました。臨床しかり、研究しかり、教育もまたしかりです。写真でご尊顔を拝するたびに思い出すその言葉は、今も胸の奥に焼き付いています。幸いにも楽しいと思える仕事に就けている現況、まだまだ自分の夢の実現にはほど遠い身ですが、現在の師である嶋田照雅先生をはじめ諸先生方、十勝・北海道の獣医師の先輩方にご教示をいただきながら、一歩ずつしっかりと成長していけたらな、と思っております。

そんな私を、現職場である帯広畜産大学動物医療センターにてやさしくご教導くださっている宮原和郎先生に、

僭越ながら次のバトンを渡させていただこうと思います。先生の行動力とタフネスさ、そして人柄の大きさは常日頃から尊敬するところですし、獣医師としての姿、教育者としての姿は、後塵を拝して我が身の糧とさせていただきたい恩師のひとりです。宮原先生、よろしくお願いいたします。